

マイノリティ研究における文化表象の位置づけと課題

-LGBT 関連資料のアーカイブス化の現状から

○ 早稲田大学 志田哲之
東京電機大学 柳原良江

1.目的： 文化表象収集の意義と現状

本報告の目的は、日本の性的マイノリティの文化表象収集の意義と現状を考察することにある。

これまで性的マイノリティに関する研究は、主に聞き取り調査や質問紙調査といった、対象者に直接的アプローチする手法により、個人や関係のあり方、意識や実態の解明を進める手法が中心であった。一方近年、諸外国では、社会が共有し、人々の意識や行動を支えている、性的マイノリティ特有の文化研究にも注目が集まり、研究機関で資料収集が進められ、実証研究を進める上での基盤を構築しつつある。

2.日本の現状

これまでの日本の性的マイノリティ文化研究として知られているのは、文化表象に基づいた歴史社会学的な分析枠組みである。この枠組みでは、当事者文化を歴史的に辿る資料として雑誌やミニコミ紙を用いてきた。また別のアプローチとして欧米のカルチュラルスタディーズが挙がる。これは文化表象を用いたマイノリティ研究の一つの形とも言え、その出自からして性的マイノリティも関心に含めていた。その影響のもと英米圏の社会学領域では、1980年代からカルチュラル・ソシオロジー（文化社会学）が盛んになっている。しかし日本の性的マイノリティ研究では、これら文化研究への関心は総じて薄く、一次資料であるチラシや小冊子、写真や映像といった多様な文化表象に人々の関心は向けられておらず、学術機関でのマテリアル収集も乏しい。僅かに個人収集の形で存在するものはあるが、それらは物理・経済的に散逸の危険に直面している。

3.外国／日本における日本のLGBT マテリアル・コレクションとその意味

日本国内のマテリアルは散逸が危惧される一方、近年、海外の大学図書館では国内外のマテリアルが積極的に収集されつつある。その一例として、イェール大学図書館における日本のコレクションが挙げられる。その一方、日本国内にはアーカイブが存在せず、議論が始まったばかりである。そこでは日本におけるアーカイブ構築の意義として、少なくとも以下の4つが挙げられてきた。それは(1)文化表象研究の推進、(2)当事者の情報保障、(3)個人収集家のマテリアル散逸防止、(4)現時点での、将来生じる研究テーマへの寄与、である。4つの意義はそれぞれ相が異なるが、いずれもアーカイブの必要性を強く訴えかけている。

4. 課題

外国の図書館による日本の性的マイノリティ資料収集状況や、日本の個人収集家の現状からは、いくつかの課題が浮かび上がる。たとえば日本国内の研究者による閲覧が物理的に困難になること、また閉じられたコミュニティを前提としてマテリアルを発行してきた人々のプライバシーの問題、さらに、個人収集家を始め日本の当事者たちがマテリアルに投影する思い入れの在処を如何に考えるか、等である。

5. 結論

日本でのアーカイブ化が進まず、またアーカイブ化には課題が存在する一方、グローバルなスケールで資料収集が進められている現状を考慮した上で、この推進を具体的に検討するならば、以下の3つの案が考案されよう。(1)海外のアーカイブへのアクセスを容易にする仕組み作り、(2)行政や民間によるアーカイブの新設、(3)既存の個人収集家によるコレクション文献目録の作成とこれらをつなげる情報ネットワークの構築、である。